

Maugham の芸術家気質小説

「Theatre」論

田 中 正 志

(一)

William Somerset Maugham (1874~1965) は詩を除いてすべてのジャンルに活躍したことになるが、小説家として名声を得る前に劇作家として、まず、世間に知られたのである。

Maugham は1903年、29才の時に“A Man of Honour”という劇が上演され、それから30年間、劇壇との関係が続き、“Sheppy”が1933年に上演され、これが彼の最後の戯曲となり、59才の時に戯曲の筆を折る宣言をする。長年、劇壇との交渉をもってきた Maugham は当然のことながら、劇場や俳優の裏表を熟知して、これまでにそのような題材での小説は一編もその時までにはなかった。“Cake and Ale”が小説家の内幕を題材にした小説であったが、はじめて、劇壇の内幕ものとしてかかれた小説が“Theatre”で彼が63才の円熟期の作品である。すでに小説家としても *Of Human Bondage* (1915) *The Moon and Sixpence* (1919) *The Painted Veil* (1925) *Cake and Ale* (1930) などで名声を得ており、自信に満ちた時代であったと言えるだろう。

(二)

Julia は舞台女優で46才である。夫 Michael は劇場を経営している。その劇場の会計を担当している Tom。この三人の食事の場面から物語は展開する。

Tom は Julia の熱烈なファンで、率直な明るい顔、憧れていた女優に会えて歓喜する姿に Julia は気持よく相手をし、彼女の写真に恩恵を施すかのように署名する。

Maugham の巧妙な手法で次に Julia と Michael の初めての出会いから現在に至る過去の回想が展開する。

Julia はロンドンの王立演劇学校に16才で入学し優秀な成績で卒業し、すぐに舞台に立つが最初は端役であったが、その後、著名な演出家 Jimmie Langton に才能を認められ、本格的な主役を演ずるようになる。そのうち、一座に Michael が入ってくる。彼は美男子で魅力的であったが自分が Cambridge 出身であることを誇りにしている俗物で、才能はないが、他人の才能を見抜く眼はすばらしく、Julia がすばらしい才能をもっていることを発見し、将来、劇場経営の野心を抱く。Julia の方が彼に夢中になり結婚する。ところが Michael は意外に現実的であるため失望するが、彼に対する愛情は変りない。そのうち、息子 Rogger が誕生する。

まもなく第一次大戦が始まり Michael は出征。Julia の方は重要な役を演じて若手女優として舞台活動を続け地位を築く。復員後、Michael の父の遺産、貯金、それに Julia の金持の女性パトロンの援助などで二人はロンドンで劇場を手に入れ劇場経営に着手する。Michael は役者からは次第に遠ざかり経営と演出に力を入れ、意外にも成功を収める。子供はイートンに入学し、生活も安定するのだが Julia は夫に対する愛はさめる。Michael は虚栄心が強く、自分の経営手腕と自分の容姿にうぬぼれて満足感にひたっている。それに対して Julia の気持ちはかつてあんなに夢中に彼を愛したことがわびしく、今では人生に裏切られたように溜息をつく。

次に又、Maugham の手法の妙を発揮して現在という設定で物語は展開。

昼食に招待した日の午後、若い会計担当の Tom は Julia の楽屋に花束をもってき、数日後に、会いたいと電話をかけるという大胆さを表す。Julia の気粉れから Tom の下宿を訪ね、やがて深い関係になり、二人の間に恋愛は深入りしていく。

最初は Tom が積極的で、もともと大女優の彼女に憧れから愛しているだけで、彼は本来不誠実で図々しい男である。Julia は冗談のような情事が本気になり、Tom の希望を実現するように力をかす。二人の関係が噂になるが Michael は人がよいので、会計担当係としての Tom を重宝がり、忙しい自分の代理として相手をしてあげると喜んでいいる。Tom は Julia の手助けで社交界に出入りするようになり、恋愛の相手としてより、大女優の看板を利用するだけである。

Julia と Michael は別荘で休息をとり、数人の知人を招待する。勿論、Tom もその一人である。しかし、ちょうど、帰省した息子と Tom が遊びをふざけ、自分を無視したことに悲しみを受ける。そこで二人の間にトラブルがおり、立腹した Tom に彼女は大女優らしく、悲しみにあふれた女性であることを巧みに演じてその場を切り抜ける余裕がある。そして、心の中で男の馬鹿さにあきれを。

その後、今までの関係が続くが Tom が若い女優の卵と交際していることを知る。Tom は厚顔にも Julia に頼んで彼女を舞台に出れるよう働きかける。Julia は怒りをおぼえながらも彼女を調査してみると演技力のない大根役者であることを見て取る。しかし Michael には彼女には有望な女優の卵として使ってくれるように依頼する。Julia には Tom に対する復讐を計画する。

Tom を若い女優の卵にとられることを思うと Julia は苦痛を感じ暗い気持ちになる。たまたま出演していた芝居の中で男性と別れる場面があったので、その男性を Tom に投影してその苦しさを舞台の上で自分の感情をぶちまけて熱演する。Julia にとっては現実の感情を舞台にもちこんだのだから最高の演技だと自負していたところ、Michael は大根役者の演技だときめつける。Julia にとっては心外で最初は立腹するが現実の体験的感情を舞台にもちこんだのでは芸術にならぬことを知る。

自分を取り戻すために、フランスに休養に出かける。夫から事務的な手紙を受けとり、又タマリー卿からの愛情あふれる手紙を受けとる。タマリー卿は Julia の20年来の讃美者で彼女を教養豊かな女性にしてくれた紳士である。Julia とはみだらな関係もないが、誤解されて妻に逃げられ現在も独身である。Julia

は今までの長年にわたるタマリー卿の愛情に報いる決心をして帰国する。早速、タマリー卿を誘惑するが彼はそれに応じない。Julia にとっては意外さに驚いたが、そこは大女優の演技力でその驚きを取りつくろうことになる。

Julia は自分の魅力を試めすため、その翌日ロンドンの下町を歩いてみる。その結果、言い寄ってきた男性は彼女を写真で知っていた人で自分の恋人のために大女優のサインを欲しがっただけで、魅力ある女性として言い寄る人はいない。

彼女がフランスに行っている間に次の芝居の準備ができており、その舞台稽古で Julia のさびしい気持ちはまぎれる。Tom の恋人 Avice も出演することになる。Julia は熱演して共演者の Avice を圧倒し Avice を舞台に立とうという野心を打ちくだく。Julia のすばらしい演技力に魅了された Tom は彼女に近づいてくる。

They went out as Tom came in. Tom's face was red with excitement.

"My dear, it was grand. You were simply wonderful. Gosh, what a performance."

"Did you like it? Avice was good, wasn't she?"

"No, rotten." ⁽¹⁾

Julia は Avice をやつつけることによって Tom に対する復讐を終え、愛欲の世界から脱皮する。肥満を恐れることもなくなりピフテキを食べる。

(三)

Maugham が「Theatre」で使った小説方法について考えてみたい。

物語の展開は時間的に追ってみると、第1章を現在、第2章～第9章までは過去、そして第10章～第29章まで又現在にもどるという Maugham の得意とする時間差展開を駆使し巧妙なる構成である。

小説の主体は勿論、最後の現在における Tom を本気に愛した大女優 Julia の愛欲の葛藤にある。この小説の面白い点は最初の章と最後の章で食物を取扱

っているところである。

Maugham の作品で *The Moon and Sixpence*, *Cakes and Ale*, *The Razor's Edge* 及び短編等において、一人称単数で「わたし」なる人物、即ち、Maugham 自身が登場し「わたし」の視点から物語の事件や人物の性格を描写するという形式を好んで用いるのだがこの小説「Theatre」では主人公の Julia の意識を通じて物語は展開する。さらに普通の言葉で表現しない主人公の意識の流れ的なものを Julia の会話の後に丸括弧（ ）に入れて「内面の独白」という手法を用いている。

“I wasn't thinking of a part. If I could have an understudy—I mean, that would give me a chance of attending rehearsals and studying your technique. That's an education in itself. Everyone agrees about that.”

（“Silly little fool, trying to flatter me. As if I didn't know that. And why the hell should I educate her?”）“It's very sweet of you to put it like that. I'm only a very ordinary person really. The public is so kind, so very kind. You're a pretty little thing. And young. Youth is so beautiful. Our policy has always been to give the younger people a chance. After all we can't go on for ever, and we look upon it as a duty we owe the public to train up actors and actresses to take our place when the time comes.”

Julia said these words so simply, in her beautifully modulated voice, that Joan Denver's heart was warmed. She'd got round the old girl and the understudy was as good as hers. Tom fennell had said that if she played her cards well with Roger it might easily lead to something.

“Oh, that won't be for a long while yet, Miss Lambett,” she said, her eyes, her pretty dark eyes glowing.

（“You're right there, my girl, dead right. I bet I could play you of the stage when I was seventy.”）

“I must think it over. I hardly know yet what understudies we shall want in our next play.”⁽²⁾

Maugham は Julia の言葉を冷静な目でながめている影の Julia を設定しているのである。

(四)

Cakes and Aleで Maugham は Rosie という女主人公を外側から観察する形式、しかし、この小説の Julia は自分の側、つまり内側から観察する形式をとっているが、共通点は二人とも奔放な身持ちの悪い女性である。

Maugham は「Theatre」の序文の中で批評家の Julia に対する不道德説に対して彼女に非常に愛着をもち、彼女の行為に寛大な気持ちで見ただけだと述べている。

モーム研究家の山川鴻三氏は

Rosie と Julia の奔放さについて次のように述べている。

「二人ともロココふう享楽主義に由来するのである。Julia の享楽主義は Rosie の享楽主義をうけつぎ、これを発展させたものにほかならない。二人の享楽主義はともに、現在を楽しめということにあるが、ただ Rosie が死んでしまえば楽しめないから生きているうちに楽しめというのに対して、Julia は年を取ってしまえばみにくくなり楽しむことができないから、若い美しい間を楽しめというのである。」⁽³⁾

オスカー・ワイルドは「ドリアン・グレイの画像」の中で

きみの青春が去るときには、きみの美もまた去るだろう。

きみの顔は土色になり、頬はこけ、目はかすんでくるであろう。

ああ、きみが青春をもっているあいだに、きみの青春が何であるかを
知りたまえ。きみの黄金の日々を浪費したもうな。 生きたまえ。きみ
のうちにあるすばらしい人生を生きたまえ。

新しい快樂主義——これこそわれわれの世紀が求めているものだ。⁽⁴⁾

(五)

Maugham はこの作品の中で女優の全くウィットに富む会話、そして行動を巧妙に駆使し且つ写實的に描写し読者をして満足させるという表現技術は全

く演劇界の裏表を熟知しているだけに見事というべきであろう。

Maugham は一般に通俗作家と言われているがこの「Theatre」こそ、通俗小説の代表と言えるのではないだろうか。

この作品は結局は story の珍しさ、面白さを Maugham の技巧でぐんぐんと魅了していく。

しかし、通俗小説にとどまらない世界へと導いてもいるのである。

Julia は女であり、又女優である。女優は芸術家の分野に入る。従って、この作品は Maugham の得意なテーマである。Julia という一女性の遍歴の小説でもあるが、Julia という女優の遍歴を描いた芸術家小説でもある。

46才の Julia も生涯異性への煩惱をもち、利己的な若き男性 Tom の誘惑に情熱は燃える。

情熱だけでは芸術とは言えない。従ってその情熱を芸術に昇華させ、苦悩を芸術に転化させ、それを克服することで女性であり、女優である主人公の煩惱からの脱出を Maugham の筆致で巧妙に試みた点で成功していると言えるだろう。

Maugham は劇作家として活躍し、楽屋裏のことは知りつくしているだけに俳優たちの日常生活にも詳しく、「Theatre」の Preface の中で俳優たちの勤勉さ、勇気、忍耐それに良心を讃えて次のように述べている。

Even in my early youth I was never stage-struck; but whether because I am by nature of a somewhat sceptical disposition or whether because my mind was filled with private dreams which satisfied my romantic yearnings, I cannot say; and when I began to have plays acted I lost even the few illusions I had. When I discovered how much effort was put to achieving the gesture that had such a spontaneous look, when I realized how often the perfect intonation which moved an audience to tears was due not to the actress's sensibility but to the producer's experience, when in short I learnt from the inside how complicated was the process by which a play is made ready to set before an audience, I found it impossible to regard even the most brilliant members of the profession with the same awed and admiring wonder

as the general public. On the other hand I learnt that they had qualities with which the public is little inclined to credit them. I learnt, for example, that with few exceptions they were hard-working, courageous, patient and conscientious.⁽⁵⁾

さらに Maugham は芸術家の特質について彼の芸術観を展開している。

Thirty years elapsed between the production of my first play and the production of my last and in that period I was thrown into intimate contact with a great number of distinguished actresses. Julia Lambert is a portrait of none of them. I have taken a trait here and a trait there and sought to create a living person. Because I was not much affected by the glamour of the brilliant creatures I had known in the flesh I drew the creature of my fancy, I daresay, with a certain coolness. It is this, perhaps, which has disconcerted those readers who cannot separate the actress from the limelight that surrounds her and vexed those actresses who have been so dazzled by the limelight that they honestly think there is no more in them than that. They do themselves an injustice. The quality of the artist depends on the quality of the man and no one can excel in the arts who has not, besides his special gifts, moral rectitude;⁽⁶⁾

「……芸術家の特質はその人の人間としての特質に左右されるのであり、特殊な才能の他に、道徳的な正しさをもたぬものは、芸術の道に秀でることはできない」

さて、この作品の主人公 Julia にとっての道徳は若き男性と恋を清算し、女優として舞台上に彼女の情熱を捧げ、自分の弱さをかくして美しいものを創造し、その世界を自分の現実として生きていく。

<Bibliography>

Maugham, W. S.; Theatre Heinemann 1937.

Brophy John; Somerset Maugham, Supplement to British Book News.

Maugham, W. S.; The Summing Up Heinemann 1938.

Calder, R. L.; W. S. Maugham and The Quest for Freedom, New York, Doubleda 1972.

Maugham, Robin; Somerset and All the Maughams, Greenwood Press Publishers.

Janas Klaus W.; The World of Somerset Maugham, Greenwood Press Publishers.

Curtis Anthony; Somerset Maugham, Macmillan Publishing Co, Inc. New York.

Maugham Ted; Maugham A Biography, Simon and Schuster Nou York.

「サマセット・モームの全小説」	越川 正三著	南雲堂
「モームの世界」	相良 次郎著	評論社
「モームの研究」	中野 好夫編	英宝社
「モーム」	上田 勤著	研究社
「モームの二つの世界」	山川 鴻三著	京都あぼろん社
「サマセット・モーム小説群」	越川 正三著	関西大学出版部
講座・イギリス文学作品論 「サマセット・モーム」	高見 幸郎著訳	英潮社
20世紀英米文学案内19 「サマセット・モーム」	朱牟田夏雄編	研究社

<Note>

- (1) Theatre (Heinemann 1950) p.284.
- (2) op. cit, pp.192~193.
- (3) 「モームの二つの世界」 p.173.
- (4) 「オスカー・ワイルド全集」コリンズ版 p.32.
- (5) Theatre (Heinemann 1950) p.x.
- (6) op. cit, p.xi.